

平成25年度 国臨協関信支部主催症例検討会

乳腺腫瘍の超音波診断



国立がん研究センター中央病院 病理・臨床検査科 中島 幸恵

Case 3

【症例】40歳代、女性

【現病歴】2008年12月の検診にて異常を指摘。前医CNBにおいて、悪性所見を認めなかった。画像上、悪性を除外出来なかったため、当院で切除生検を希望された。

【血液検査所見】腫瘍マーカーの上昇を認めなかった。

【超音波】右A領域に1cm大未満の構築の乱れを伴う低エコー腫瘤を認めた。不整形、境界明瞭粗造、棘状突起構造を有した。周囲組織の強い引きつれを認め、明らかなhaloを認めなかった（図1）。立体感があり、硬癌を疑った。

【MRI】右A領域に9mm大の腫瘤を認めた。やや周囲の引き連れを伴う、局所性の造影効果を示す腫瘍であった。乳癌が疑われた（図2）。

【入院後経過】当院の生検においても、悪性所見を認めなかった。前医同様に、画像上では乳癌を除外できない所見であったため、ご本人希望にて局麻下腫瘍摘出術が施行された。

【病理組織学的診断】病理では、USで指摘した病変の近傍に、同様の副病変も認めた。新鮮切除標本の断面では、放射状のひきつれを伴う瘢痕の形成を2カ所に認め、US指摘病変の中心部に発赤を伴っていた。組織像では、副病変は、線維化のみで上皮成分を含まなかった。US指摘病変は、硝子化や膠原線維の変性を伴う線維化を背景に、乳管上皮の増生を伴う大小の乳管が放射状に分布しており、弱拡では一見硬癌に類似した組織像を示した。強拡では増生する上皮成分は2相性は保たれており、異型に乏しく悪性所見を認めなかった（図3）。病理組織型診断は上皮の過形成を伴う放射状瘢痕(Radial scar)であった。

【考察】US指摘病変は、haloは伴っていない。しかし、引きつれを伴い、立体感もあることから硬癌を疑った。

【ポイント】今回は良性であった。しかし、縦横比の大きい不整形低エコー腫瘤は、基本的には悪性の可能性が高い。大きさが1cm以下でも乳癌と診断が可能な場合もある。小さな病変は触知されにくく、とにかくUSで検出することが大切である。見落とさないスピードで、乳房全体を広範囲に隈無く観察する必要がある。

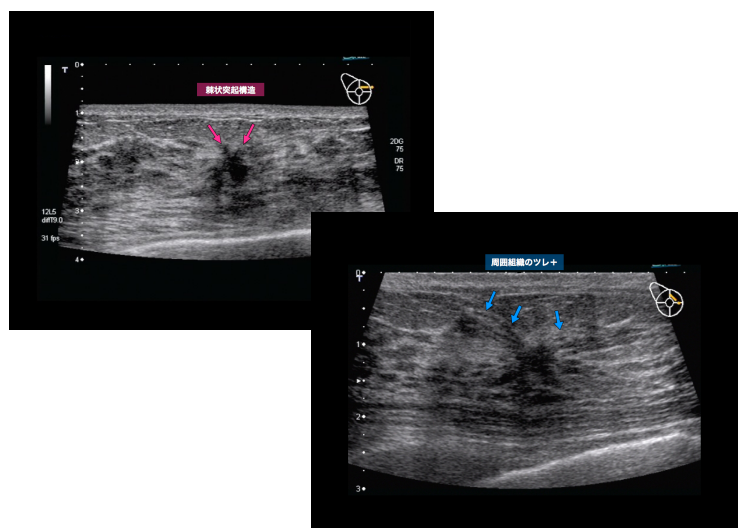


図1 水平断走査と矢状断走査

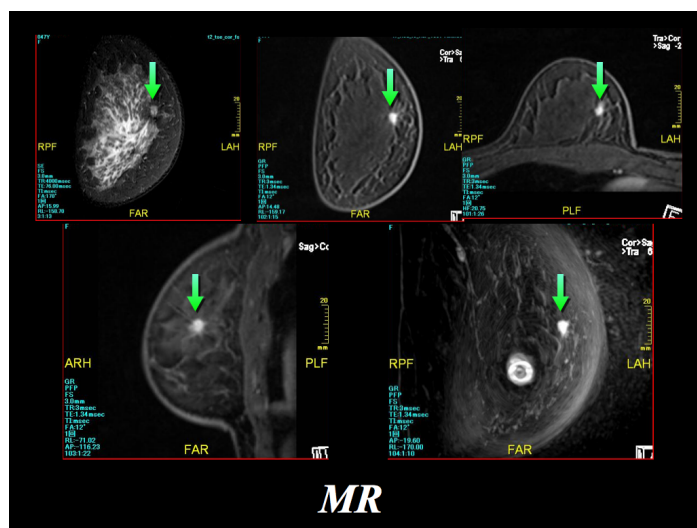


図2 MRI

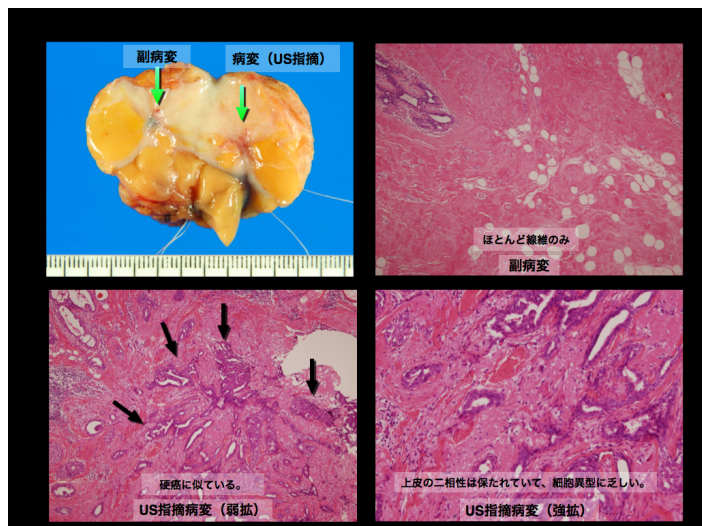


図3 新鮮切除標本断面と組織像

Case 4

【症例】60歳代、女性

【既往歴】2005年 右乳癌の診断で加療後に右乳房切除（pCR）

【現病歴】2009年6月、左E領域に硬結自覚。マンモグラフィにおいて分葉形腫瘍を指摘された。

【血液検査所見】腫瘍マーカーの上昇は認めなかった。

【超音波】左BDE領域に5cmの腫瘍を認めた。不整形、境界明瞭粗造・一部不明瞭、後方エコー増強を示した。前方境界線断裂と周囲の引き連れを伴っていた。内部エコーは極めて低く、不整な高エコー斑を多数含んだ。縦横比は高く、前方境界線断裂像を認めた。浸潤性乳管癌と考えた。内部エコーは、通常の浸潤性乳管癌と異なる所見であり、特殊な組織型を示す乳癌の可能性も考えた（図1）。

【マンモグラフィ】左BD領域にspiculaを伴う5cm大の高濃度腫瘍を認めた（図2）。

【MRI】左BDE領域に4.5cm大の境界不明瞭な不整形腫瘍を認めた。Dynamic studyにて、リング状に早期濃染しWash outするパターンを呈した（図3）。化生癌（扁平上皮がん）が疑われた。

【入院後経過】浸潤性乳管癌と診断され、左乳房切除術が施行された。

【病理組織学的診断】新鮮切除標本の断面にて、境界明瞭、辺縁凹凸不整、内部に軽度の出血を伴う黄白色の斑状の領域を伴う充実腫瘍を認めた。病理組織学的に、紡錘型の細胞からなる密度の高い腫瘍で、細胞密度の低い硝子変性を伴う斑状の領域を多数認めた（図4）。腫瘍は脂肪組織に浸潤していた。最終診断は紡錘細胞癌（spindle cell carcinoma）（4.1X3.0cm）であった。

【考察】本症例は、病理組織では紡錘細胞からなる肉腫様の腫瘍であった。このため、無エコーに近い低エコーを示す部分は、病理では細胞密度の高い領域を反映した。不整な高エコー斑は、細胞密度が低く、硝子変性が多数含まれた領域に相当した。

【ポイント】乳癌取り扱い規約第17版において、浸潤癌の特殊型に分類され、WHO分類では、化生癌（Metaplastic carcinoma）の一亜型とされている。乳癌全体の1%以下と非常に稀な腫瘍である。本症例の内部エコーは、通常の浸潤性乳管癌で認める所見とは異なっていた。鑑別診断では、特殊な組織型を示す浸潤性乳管癌の診断にとどまった。

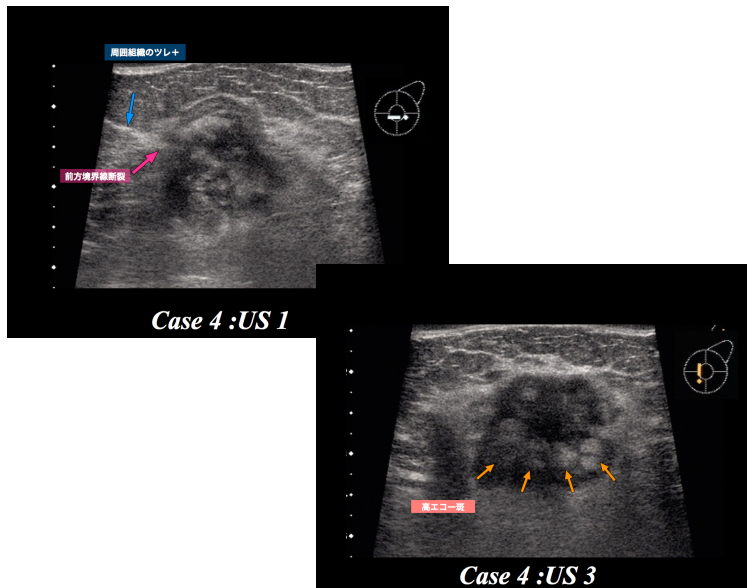


図1 水平断走査と矢状断走査

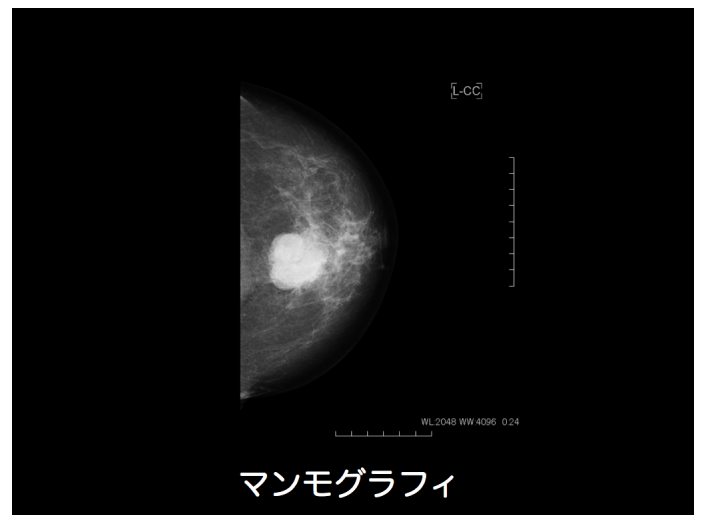


図2 マンモグラフィ

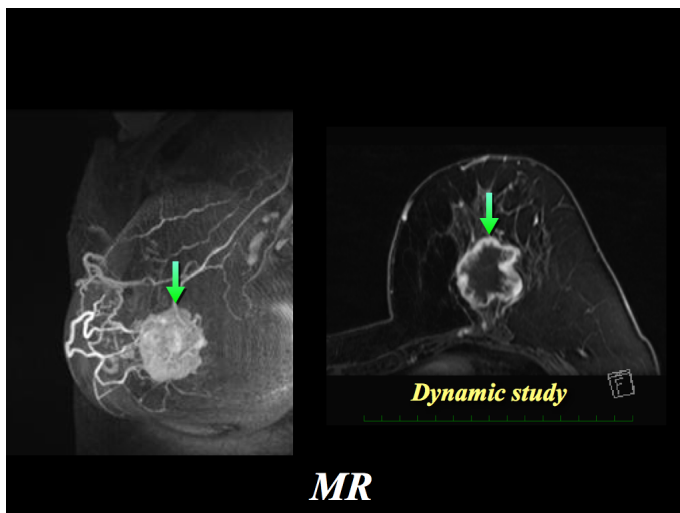


図3 MRI

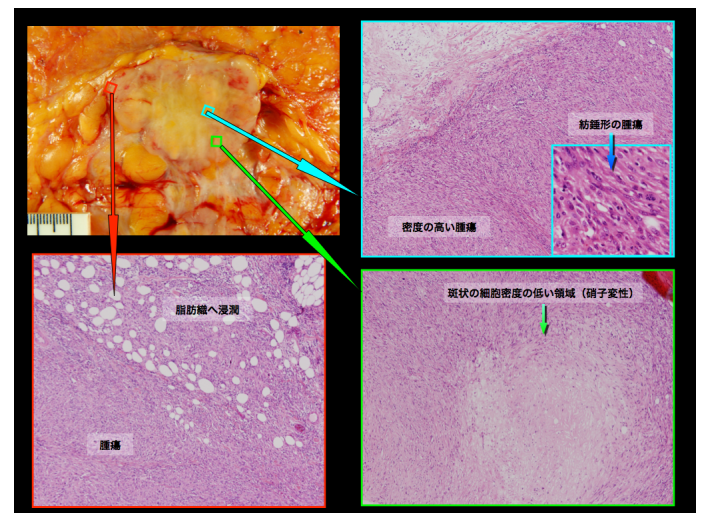


図4 新鮮切除標本断面と組織像